
二つの世界

尼崎 太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二つの世界

【Nコード】

N4784F

【作者名】

尼崎 太郎

【あらすじ】

この世に幽霊というものが本当にいるか解りませんが、この話は皆さんが暮らしている世界の同じ場所、時間の中でこんな出来事が、身近でおきているかもしれない。そんなお話です…

プロローグ

とある夕方、二十代前半の女性が街中を歩いている。

彼女の後を付いて歩くのが僕の日課になっている。えっ！！ストーカーっ？違う違うそんなじゃない！！

「おつ、竜ちゃん今日もストーカー活動やってるね」

だから違うって…

そういつて近付いて来たのは源さんという僕の知人だ。

「源さん誤解を招くような言い方しないでよ」

「悪い悪い」

少しムツとした顔の僕を見て謝る源さんに

「だいたい幽霊にストーカーも何もあつたもんじゃないでしょ」

「ははは、そりゃそうだわ」

そう、僕朝倉竜太郎はこの世のものではないらしい。もちろんその僕とこうして話す源さんも同じ立場の人？である。

続に幽霊というやつであろうか。

「しかし竜ちゃんも毎日毎日、飽きずによくやるよな」

僕の横を付いて歩きながら源さんが語りかけてくる。

「あれからもう半年の間ずっとだものな」

「ええ…まあ…」

あれからとは、僕と源さんの出会いに遡る。さかのぼ 宙にふわふわと気を失ってさ迷っているところを、源さんに助けられたのだ。さつき、この世のものでないらしいと言ったのは、源さんに助けられ気付いた時からの記憶しかないのだ。

唯一覚えていたのは名前だけ、これが記憶喪失というものだろうが、死んだ記憶すらないのだから、実感がいまだに沸かない。

「あの時は本当にありがとうございました」

「いやいや困った時は人間助け合いさ。いやいや幽霊助け合いか。わあははは」

…笑えない

まあ、そんなこんなで話をしながら彼女の後を付いて歩いていると幼稚園へと彼女が入って行く。すると園内の砂場から、一人の少女が彼女の元へ小走りで駆け寄って抱き着く。そのすぐ後に少女の担任の先生であろうか、彼女に近付き軽く会釈をして彼女と少女は幼稚園を後にした。

ここ半年、僕が続けている日課がここで終わるのだ。

半年も続けて名前は？と思うだろうが、付けて歩くと言ってもかなり上空から付いて歩いているのであって、会話など聞こえるはずもなく名前などわかるはずがない。

だから彼女と少女という他表現のしようがない。

「しかしあれだな、竜ちゃんも若いのに人妻を好きになるとは隅におけないね」

「い、いきなりなんですか」

「おじさんもあったなあそういうとき。うんうん」何がうんうんだ。

「勘違いしないで下さいよ、確かに何故かはわかりませんが別に好

きだから付けてる訳じゃないですて。まあこんなになってやることなく暇だからなんとなくですよ」

「ははは、わかったよ。だからそんなムキにならないでくれよ」

「その証拠に旦那と歩いてるの見てもなんとも思いませんし」

そう旦那と二人で娘を迎えに来てる姿を何度か見たことがあるのだ。それを見てとりわけてどうと感じたことはない。本心である。

「まあそれなら安心だわ。このまま浮遊霊が一番、執着を持ちすぎると地縛霊になっちまうから気をつけてな」

「もちろん解ってますよ」

「じゃあそろそろ行くわ」

「はい、ではまた」

こうして源さんは完全に陽が落ちた闇夜に消えて行くのであった。時刻は七時を過ぎる頃だろうか、これから肌寒い季節がやってくる。

焦燥

ザワザワ…ガヤガヤ…

ブロロロロ…ガタンゴトン…

慌ただしく多くの人が僕の横を通り過ぎる。今僕は街中の交差点を一人ガードレールに座りたたずんでいる。

目の前の時計台は午前八時になるうとしていた。いわゆる朝のラッシュ時なのであるう。ほとんどの人が時間に追われるように交差点を無言で足速にすれ違っている。僕も生前はこんな感じだったのだろうか？

見た目は二十代前半から後半にかけて、しかも着ている服はスーツ…ああ、源さんいわく幽霊とは生前によく着ていたものやなにかしら思いの強いものの恰好になるらしい。

そう考えると僕自身も周りの人達同様朝のラッシュ時にせわしなく歩くサラリーマンと考えるのが妥当であろう。まあそんなことを考えながらそんな人達とは正反対にゆったりとした時間が流れている。時計台は八時半を指している。

遅いな…

と、いつでも時間がではない。実はここにいるのには理由がある。人を待っているのだ。まあ人といっても幽霊だけど…

「八時で言っていたのに…」

そう独り言のように呟いていると

「おーい竜ちゃん!!」

と、背後から聞き慣れた声で僕を呼ぶ声がある。振り返ると源さんが慌てた様子で走って…いや飛んで来た。

「悪い悪い。寝坊しちゃった」

「うわあ、またですか？いつも寝坊じゃないですか」

「いやー、歳喰うとどうも朝が弱くてな」

「それ普通逆でしょ？てか、歳変わらんでしょ幽霊なんだから」

「身体は変わらなくても気持ちの問題さね」

「まあもう慣れましたけどね」

「なににせよ悪い悪い」

と、まあ源さんの寝坊癖は今に始まったことではないのでこれ以上つつかないでおこう。

「じゃあ取りあえず行こうか」

「はい、いつもすいませんね」

そう、源さんと何故待ち合わせをしてたかと言うとある場所に向かう為である。

僕が幽霊になってから月に一回程度必ず源さんと共に立ち寄る場所があるのだ。そこは源さんの同行がなければあまり僕には意味のない場所でもある。

そして二人は繁華街の少し路地裏沿いのある店へと到着した。

相談屋

人と霊について

何度見てもうさん臭い看板だなと思う。生前なら間違いなく縁のない店だと思いながら店の中へと入る。

「いらつしやいませー」

元気な声で出迎えてくれたのは僕と歳がそれほど変わらないショートカットのよく似合う笑顔から八重歯がこぼれるのが印象的な女性である。

「あら源さん久しぶりね。竜太郎さんもこんにちわ」

「いや今日も笑顔が可愛いね葵ちゃん」

源さんがいつもと変わらない挨拶をかわす。

「やあ、葵さん。」

僕もいつもの感じで軽く挨拶を交わす。

…え？何故人と普通に会話が出来るかつて？

ははは、簡単な話が僕と源さんと同じ幽霊だけである。

僕より一年先輩でどうも病気で亡くなったらしい。まあ取り分け僕が知っている彼女への情報といえはこれくらいである。

「さあ、ではこちらへどうぞ」

と、葵さんが二階の方へと案内する。その僕たちのやり取りを店の中で何事もないようにあくびを一つ眠そうに眺めている人がある。不精髭にボサボサ頭、店の中央やや左に置かれている丸椅子に座りなんともやる気のなさかひしひしと伝わってくる。

彼こそがこの店主である。僕たちのやり取りを眺めているといっても彼には僕たちが見えていない。まあこちら側のモノではないから当たり前といえは当たり前なのだが看板を見た通りどうも霊媒師のような関係の職務を生業なりわいにしているらしい。

それなのに僕たちの姿が見えないということは最初の店の印象どりまがいものだろう。

彼の横を素通りし階段を上るとすぐ部屋へと続くドアに着いた。

「さあ、ではどうぞ。まだ他のお客様は来られていないので。」

葵さんが中へ入るよう促す。いつもはこの時間でもすでに先客がいるのだが今日は珍しく僕たちだけみたいだ。

「お、そりゃツイてるな。竜ちゃん行こう」

「は、はい」

源さんも同じことを思ってたみたいだ。ふっー、少し緊張するな。いつものことだが…

「失礼するよ」

ガチャッ…とは鳴らないが。素通りするのだから。

「来たの」

何と云うか貫禄のある声で部屋の主が声を発する。

「ヨネさん今日もよろしく頼むよ」

「お、お願いします」

「まあ座るがよい」

そいつって主の向かい合わせの椅子にと奨められ僕と源さんは椅子に座った。

話し方とは逆に僕の目の前に座っているヨネという女性…いや少女と言った方がいいだろうか。黒い着物姿でオカッパ頭、十歳程にしか見えないこの少女こそヨネというこの部屋の主なのだ。

「ふむ。で、源よ。またこの坊主の件かの？」

「いやーその通りだね。よろしく頼むよ」

「お前もお人好なことよの。まあよい、ではモノを出すがい」

「はいよ」と言うと源さんが両手を机の上に広げそれを見たヨネさんがさらにその上に手をかざす。

その瞬間二人の手の間からまばゆい光が現れる。ゆっくりかざした手をヨネさんが自分のもとへと戻し始めると光がヨネさんの方へと手繰り寄せられる。

「ふむ。まあまあじゃの」

そう言うのと胸の辺りにふわふわと浮いている光を両手で手を合わせような感じで包み込むとその光は消えていった。

「おっ、結構出て良かった。」

源さんがヨネさんの言葉を聞き少し安堵の表情を浮かべた。

「まあ彼岸過ぎ^{ひがん}じゃからの」

とヨネさんが言う。今の光の正体というのはどうも亡くなった人への供養の気持ちか形となつて現れるものであるらしい。墓参りなどがいい例である。通常こうした光としてではなく届いた思いを霊それぞれが形にしたりして（例えば源さんは大の酒好きだから酒に変えて飲むなど）使うことが出来るらしい。

ヨネさんはそれを少し分けてもらう代わりに霊の悩みを解決するという、まあいわゆる悩み相談屋というものらしい。みんながみんなそんな真似が出来る訳ではない。ヨネさんが特別なのだ。なんでも昔の高名な霊媒師の家系らしく、すでに四百年近くも霊としてこの世にとどまっているらしい。

だから少女の外見からはすぐかわない言葉使い、独特の雰囲気をもし出しているのだ。

「ふむ、さて小僧始めるかの。」

「は、はいお願いします。」

そういうや否やヨネさんが僕の頭の手をかざす。

……ブツブツブツ……

なにやら一人ごとのようにヨネさんが呟くと頭にかざされた手が光を放ち始めその瞬間僕の頭の中が真っ白になった。
僕の頭の中を覗かれているような感覚……あまり好きではない。
しばらくするとヨネさんが頭にかざした手を戻し

「ふむ……」

と、少し考え込んだ。

「ど、どうですか？」

僕は緊張した面持ちで尋ねる。その問いにすぐ返事はなく暫くヨネさんは黙って考えこんでいる。

「なんか解ったのかい？」

源さんもたまらず口を開く。

「駄目じゃの。」

重く口を開くヨネさん。続けて

「この半年お主の頭の中を見たが名前とこの辺り周辺に住んでいたこと以外何も解らぬ…深く入り込もうとすると闇の中へと辿り着きそれ以上見えんのじゃ。」

そう言うところネさんは僕の顔を見て

「ふーむ、通常小僧に“念”が集まりさえすれば辿っている解るものなのじゃが…」

“念”とはさっきの源さんから取り出された思いのことである。そう、前述に源さんと来なければ意味のない場所と言ったのは源さんのように僕には“念”がこの半年全く集まらないのだ。つまり供養にきたり家の遺骨などに祈りを捧げてくれる人がいないことになる。

源さんがいなければ条件に“念”を分けて貰うというこの規定に僕は満たない。

「小僧、生前よほど人から好かれなかったようじゃの。わはははは」「うつ…」

何も言い返せない。

「ま、まあまあ竜ちゃん」

源さんが僕を気遣って声をかける。

「源よ、お主も“念”の無駄遣いはやめることじゃ。何度来ても同じことじゃて。」

ヨネさんの言葉が胸に突き刺さる。源さんは僕の為に貴重な“念”を使ってくれている。その分源さんが具現化出来るものが減ることになるのだ。「ありがとうございました」

僕はやつのことで声を絞りだし立ち上がる。

「お、おい竜ちゃん」

心配そうに源さんが声をかける。

「源さん本当いつもすいません。けどやはり今の僕には手掛かりがないようです。ヨネさんの言う通りこれ以上僕の為に“念”を使わないで下さい。」

僕は知っている。源さんがここ最近大好きなお酒を飲んでいる源さんを見たことがない。初めて出会った頃あれだけ飲んでいたのに。僕の為に“念”を貯めていてくれるのだ。

赤の他人にそこまでしてくれる源さんは本当いい人である。生前からきつとそうだったのだろう。だから源さんの為に“念”も集まるのだろう。

その“念”をこれ以上僕の為に使わすのは申し訳なさすぎる。

「じゃあ僕はこれで失礼します。」

「あ、ああ。俺はもうちよつとここにいるよ。少し別件で見てもらいたいことあるからさ。」

「解りました。では失礼します。ヨネさんもうありがとうございました。」

そう言い残し僕は部屋を後にした…

……

「ヨネさんちょっと言い過ぎだよ。」

「源よ、わしに意見するのかい？」

「いや、別にそういう訳じゃないけどさ。あまりに竜ちゃんがかわいそうで……」

「ふん。まあよい。しかし源よ、あまりあの小僧に関わらん方がお主の為ぞ。お主とのよしみじゃ忠告しておこう。」

「そ、それってまさか…地縛化かい？」

「まだそうとは決まっておらんがな…。少しあ奴の闇が気になっての。」

「…そんな…」

変化

ヨネさんの店を後にして、自分には何故“念”が？一体生前、記憶があつた僕とはどんな人間だったのか？自問自答しながら空をふわふわとさ迷つていたら陽が落ち始めていることに気付いた。そろそろか…

僕はいつもの場所へと向かった。そう、日課の始まりである。駅から少し離れた場所にあるスーパー、その従業員出口より少し急ぎ足で彼女が出てきた。

「お、いたいた。」

独り言を呟いて僕も彼女の後を離れた上空からついて行く。向かう先はもちろん少女のいる幼稚園だろう。

……??

暫く歩いていると幼稚園とは違う方向に向かっていることに気付いた。

―なるほど―

彼女は近くの病院の中へと入って行った。思った通りだ。以前旦那と少女を迎えに行くのを目撃したと言ったが、どうも旦那はこの病院の関係者らしく二人で迎えに行く時は必ず彼女が一度病院へと立ち寄るのだ。それほど大きいというわけではないがそれでもこの辺りではなかなかの病院である。

少しすると彼女が一人病院から出て来た。

そしてまた幼稚園の方へと歩き出したのだ。

どうやら旦那はまだ仕事なのだろうか一人で迎えに行くみたいである。半年の間でちよくちよく病院に立ち寄ってから幼稚園に行く光

景を見て来たが忙しいのであろう、数える程しか旦那の姿を見たことがない。

ともかく一人歩く彼女をまた僕は後をついて行くのであった。

幼稚園と目と鼻の先にある十字路に差し掛かったときいつもと違う光景があつた。

園内の砂場で待っているはずの少女の姿がないのだ。園内へ続く門に着いた彼女も異変に気付く。彼女を見つけた担任の保母が慌てた様子で彼女に駆け寄つて、何やら話をしている。

：気になる。遠くからで話し声はもちろん顔の表情すら判別出来ないが、ただ事でないのは明らかである。：よしっ！行ってみるか。半年で初めて違う行動を取ることに若干緊張しながらも彼女達のもへと降り立った。

「本当に申し訳ありません」

保母が彼女に頭を下げている。

「もういいですから。取り合えず園内にはいないことは確かなんですね？」

初めて聞く彼女の声の方へ目をやると明らかに動揺を隠せない彼女の顔がはつきりとわかる。

「はい、園内は隈なく探したのでおそらく外に出してしまったのかと……」

どうやら少女は彼女を待てず外に出てしまったらしい。

「今職員総出で外を探しているところなんです。」

「わかりました。私も探してきます。」

そう言うと彼女は走り出してその場を後にする。かなり焦っているようだ。

そりゃそうだ。陽もほぼ落ち辺りは薄暗くなり始めている。この世の中あんな小さい少女一人にいるには危険過ぎるだろう。

僕は彼女に同伴することにした。彼女は走り、辺りを見渡しながら

「明日香っ！！どこにいるの。いたら返事して」

彼女が声を振り絞り叫ぶ。だが返事はなく周りの通行人が不思議そうに彼女を見ている。彼女がその通行人に

「すいません。その幼稚園の制服を着たこれくらいの女の子見ませんでしたか？」

「いや見てないな」

彼女の問いに通行人は答えた。

その返事を聞くや彼女はお礼もそこそまた走り出して行った。僕も少し心配になって来た。僕は上空に上がり辺りを見渡す。どこだ？えーっと、たしか明日香ちゃんだったな。

！！いた！

彼女の反対の方向に歩いているのを見つけた。僕は彼女の方へ急いで戻った。

……戻ってどうすればいいのだろうか？

戻ったところで彼女に伝える術すべが僕にはない。ヨネさんじゃあるまいし……

「明日香ちゃんこっちいましたよ。」

取り合えず話し掛けて見るがやはり返事がない。必死に周りを探し

続けている。どうすればいいんだ…上空に上がり明日香ちゃんのいる場所をもう一度確認する。見事なまでに幼稚園の職員も全く違う場所にいる。

くそっ！！

僕には何も出来ないのか。彼女の元へ戻るがどうしようもない自分に腹立たしさを覚えた。

「明日香っ、明日香っ！！」

必死で探す彼女。

くそっ！くそっ！！一体僕はなんて無力だ。“念”が集まらない僕はきつと生前余程最悪な人間だったのだろう。そんな負い目から今、少しでも何か役に立ちたいと思ったがそれすら敵わない…くそっ！！くそっ！！！！

ドクンッ！

？？何だ？

ドクッ！ドクン！

胸が苦しい…なんなんだ一体…

ここにはいけない！直感的にそう感じた僕は彼女達のが気になるつつもその場を急いで離れることにした。

—僕が僕で無くなりそうな感覚に陥りながら—
おちい

……………

「こっちにいました！」

「！明日香！！」「ママごめんなさい」

「良かった、心配したんだからね。皆さんご迷惑おかけしました。」
「こちらこそ申し訳ありませんでした朝倉さん。」

転機

『お前さえいなければ…』

—なんだ？—

『彼女は俺のものになるはずなんだ…』

—だからなんの話だよ— 『だから死んでくれよ…竜太郎…』

—！！！？—

「はっ！？」

眩しい光が朝の始まりを教えてくれていた。

…夢か。あれからどうやらいつの間にか寝てしまったようだ。それにしても昨日の動悸にも似た感覚はなんだったのだろうか？

そして今の夢…うる覚えだが確かに僕に

「死ね」と…

やはり僕の生前とは人に恨まれる生き方だったのだろうか？そして揚げ句の果てに殺されたのだろうか？そう考えるととても怖い。

しかしこの夢が記憶の断片という僕の考えが正しいならば何故急に？自然と昨日の出来事に辿り着く。

—半年変わった出来事といえば彼女達に近付いたこと…—

明日香ちゃんとは？無事に見つかったのだろうか？昨日のことを思い出した僕は心配の念にかられた。あいにく今日は土曜日で幼稚園がない。平日ならば幼稚園に行き無事かどうかを確認することが出来るのだが…

やはり気になるな。せめて無事かどうかだけでも確認したい。夢のこともある。そう思うと自然と空に浮かび当てもなくさ迷うことにした。

うーん、と言っても結局いつもの場所へと向かっていた。彼女の働いているスーパーの中に入って見る。これも半年での中で初めての行動だ。朝の買い出しの主婦で賑わう店内を僕は彼女を探して歩き回る。だが彼女の姿はない。

うーん、土日は子供との時間でことで休みなのか？

それとも昨日あれから何かあったのか？

取り合えず一通り店内を探し終えた僕は店を出ていつものルートを探して見ることにした。

もしかしたら今から出勤で会うかもしれない。

ちよつとした期待を持ちながら日課の道を見るがそう甘く事が運ぶ訳なくやはりいいない。

「まあ、そうだよな。」

…待てよ。病院の中は？そう、僕はふいに旦那のことを思い出した。彼の側にいれば何か分かるかも知れない。

そう思い病院の中へと足を運んで見た。今日の僕はいつもと違い行動力があるなと感じつつ初めて入る病院に迷いながらも旦那の姿を探して見た。暫く歩くこと5分、いた！！

白衣に身を包み手にはカルテだろうか、颯爽さっそうと通路を歩く彼を見つけた。背は高く割と細身、端正な顔立ち、正に出来る医者の見本みたいな感じがする。どうやら検診みたいで、色々と病室に入ってはまた出て来るを繰り返していた。

「こんにちわ、どう調子は？」

「おかげ様で大分よくなりました。先生のおかげです。」

「良かった。これなら来週には退院かな。」

優しい声で患者に声をかけている。応対の仕方などを見てみると、まあ何と言つかいい医者なんだろうなとはたから見ても伝わってく

る。だが検診となると、これは彼女達の情報を聞くのは骨が折れるだろうな。休憩で同僚などと会話している場面でもあればいいんだが…

「田村先生」

一人の看護師が彼を呼び止める。

「そろそろ交代勤務ですよ。急患が来ると行けないので今の内に早めに休まれてはどうですか？」

「ありがとう。じゃあ後一人診ておきたい患者さんがいるからその後交代すると伝えてくれるかい？」

「はい、わかりました」

そういつて看護師は去って行った。

―田村と言っのか…―

それより願ったり叶ったりの展開である。

ひよっとしたら家に一度帰るかも知れない。違うにしてももしかしたら昨日の件で電話の一つでも、また、同僚とその話題になるかもしれない。

ツイていると思いつながら彼の後をついて行くと病室に辿り着いた。おそらくここがさっき言っていた患者がいる部屋だな。

ガチャッ

彼が病室に入り僕も続けて中に入ろうとした時、おもむろに病室の前にある名前に目をやった。

っ！！？？

304号室朝倉竜太郎

「な、なんだって！？」

ぼ、僕の名前がそこには確かに書かれている。頭の中が混乱している。どういうことだ？何故僕の名前が？

…いや同姓同名という可能性だってある。

僕は震える身体を押さえながらおそるおそる部屋へと入って行った。

「朝倉さん、どうですか？」

彼の問いにベットに横たわるその男は答えることがない。

延命措置であろうか、口元にはよく見る酸素マスク的なモノがつけられていた。その横には綺麗な花が花瓶に活けられている。

胸の鼓動がどんどん高鳴るのがわかる…僕は意を決して男の顔を覗きこんだ。

「うわっ！！」

思わず声を出して後ろにのけぞってしまった。

そこには紛れもなく僕が横たわっていた。

「脈も変わらず…か。」

僕の手首を掴みながら彼は呟く。

「朝倉さん。この花奥さんが活けてくれたんですよ。綺麗でしょ？」

彼が僕にそう話しかけた。

奥さん！？ば、僕は結婚しているのか？頭が混乱する。じゃあ今いるこの僕は？？わからない、頭が痛い。

あまりに予想外の現実を前にして僕は部屋を飛び出した。

そして頭の整理もつかないまま僕は真っ直ぐにある場所へと向かったのだった。

驚愕

病室を飛び出した僕が向かった先…ヨネさんの場所だ。

これほど慌ててどこかに向かうのなんて、この身体になってからおそらく初めてのことだろう。

「はあ、はあ。」

息を切らしながらようやく彼女の元へと辿り着いた。

「失礼します。」

中へ入ると、息を切らしたいつもと違う僕の姿に戸惑いを隠せない葵さんが

「りゅ、竜太郎さん。どうしたんですかそんなに慌てて。」

「はあ、はあ。あ、葵さんヨネさんは？」

「もちろんいますけど…」

「ありがとうございます。」

「あっ！竜太郎さん。」

僕は彼女の話も終わらない内にヨネさんのいる部屋へと向かった。

「失礼します。」

中へ入ると、ヨネさんと相談に来たのだろうか、一人の霊がびつくりした様子で僕の方を見た。

「小僧、行きなりなんだい、非常識な。」

僕の突然の訪問にヨネさんが不機嫌そうに一喝する。
遅れて葵さんが部屋が入ってきて

「申し訳ありません。今接客中と言おうとしたんですが……。」

その言葉にようやく我に帰った。

「す、すみません」

僕は慌てて頭を下げた。

「ならば早く出て行かぬか。」

「は、はい。外で待っています。」

「待たれても困るがの。これ以上お主にはなんも出ぬと言ったであらう。しつこいぞ。」

「お、お願いします。話を聞いてもらうだけでいいんです。お願いします。」

ここで引く訳にはいかない。僕は必死に訴えた。

「……まあよい。とにかく他の客に迷惑じゃ、取り合えず出てゆけ。」
「は、はい。」

僕のあまりに必死な姿を見てか、ヨネさんは帰れとまでは言わなかった。

僕は室内にいる客らしき人に頭を下げ、部屋を後にした。部屋の外に出ると、一緒に出て来た葵さんが心配そうに僕の顔を見て

「竜太郎さん一体どうしたんですか？なんかいつもの竜太郎さんじゃないみたい。」

「葵さんごめん。けど、冷静でいると言う方が無理だよ。」
当たり前だ。ついさっきまで僕は僕に会っていたのだから。
そう僕は生きていたのか？いや実際のところは分からない。
じゃあ今いる僕はなんなんだということにもなる。駄目だ、また頭
が混乱してきた。

「竜太郎さん？」

少し下を向いて黙った僕の顔を彼女が覗き込んできた。

「とにかく、ヨネさんは帰れとは言わなかった。お客の方が帰るま
で少し待たせてもらうよ。」

「そうですね。一応午前の部はあの方で最後です。」

その言葉を聞いて時計に目をやると正午に差ししかかろうとしてい
た。

葵さんと二人長椅子に座り、暫く待っていると部屋の中にいた霊が
出て来た。こちらをちらりと見てお互い軽く会釈をかわした。

今にして思えば悪いことをしたなと反省した。他の霊には聞かれた
くない大事な話なのかも知れないのに、いきなり見ず知らずの霊が
押しかけて来たのだから。

申し訳ない気持ちを持ちつつ僕はドアの前へと立った。

葵さんが頑張れと目配せで僕に合図した。

ふーっ

深呼吸を一つついた後、

「失礼します。」

と、一声かけ部屋の中へと入った。

部屋の中のヨネさんかというと…やはり不機嫌そうな顔を隠す事なく浮かべていた。

「さつきはすいませんでした。」

僕はまずさつきの非礼を詫びた。

「…」

返事がない…

何とも気まずい空気が二人の間に流れているのが分かる。

「まあ座るがよい。」

ヨネさんが重い口を開いた。

「は、はい。」

僕は少しうわずった声で椅子へと腰をおろした。

「して、話とは？」

「じ、実は信じられないことなんですが、どうも僕はまだ生きているみたいなんです。」

促された僕は咄嗟にこう答えた。

その瞬間ヨネさんの眉が一瞬ピクリと動いた。

「はっはっはっ、何を言い出すのかと思えば冗談も程々にせい。」

彼女は大きく笑い飛ばす。

「本当なんです、本当に生きているんです。」

「小僧、冗談は一回でよい。何度も繰り返されては興が冷める。」

くそっ！まるで取り繕ってくれない。

…負けてなるものか！！僕はヨネさんに昨日ここを出てから今に至るまでの経緯を隈なく話した。すると、さっきまで笑い飛ばしてた彼女の顔つきがみるみる険しい顔つきに変わっていった。

「…小僧、その話嘘偽りはないんじゃないの？」

ヨネさんは念を押すかのように僕に問い掛ける。

「もちろんです。自分で信じられませんが、全て本当の事なんです。」

「

僕は真剣な眼差しでそう答えた。

「ふむ…」

ヨネさんはその返答を聞くや黙り込んでしまった。

暫くお互い沈黙の時間が流れる。

「あ、あの…」たまりかねた僕が思わず声を出した。

「…小僧、その話が本当なら主は今幽体離脱ぬしをしていることになる。」
「幽体離脱？」

テレビ等で聞いたことがある。布団で寝ている自分を上から眺め

ているとか何とか…

「うむ。じゃがの、幽体離脱と言っても通常どれだけ長くてもせいぜい三日程のもんじゃ。」

「三日…ですか。」

「そうじゃ。時間が経てば経つ程身体と魂の繋がりが失われ、双方ともたなくなるのじゃ。」

「双方とも…ですか。」

「うむ。よいか、幽体離脱とは霊となんら変わらぬ。霊とは魂のことの。それすなわち、肉体から離れたその時点で霊魂はその肉体から離れた霊魂になる。ここまでは解るかの？」「は、はいなんとなく…。」

「つまりじゃ。幽体離脱というものは日経つほど肉体と霊魂のズレが生じるのだ。ズレが大きければ大きい程、本来一つである肉体と霊魂がまるで違うそれとなるのじゃ。」

「…！」

「理解したかの？やがて繋がっておったはずの肉体と霊魂はバラバラの個体と成し、霊魂の入ってぬ肉体はどうなる？」

「し、死体と変わらない…。」

「さようじゃ。その限界ともいえる時間が長くて三日、主のように半年など肉体の方が持つ訳がない。」

「けど本当にまだ…あっ！！医者だって脈があるようなこと言っていましたし。」

僕は彼が脈を取っていたことを言いなおすと

「わかっておる。」

そう言うと手を僕の頭にかざし

「本来“念”との交換条件以外にわしが力を使うことなどないのじやが…今回に限り特別とみなす。感謝せいよ。」

「ちょ、心の準備が…」

「この話事実なら今なら主の中の闇、その正体わかるやもしれん。」

… 全く人の話を聞いていない…

「…ブツブツブツ…」

また呪文のようなことをヨネさんが呟くと手から光が輝き出した。また頭が真っ白になる僕の嫌いな瞬間が……

「っ！！ぬおおおっ！！！！！！」

ヨネさんが奇声を発し頭に翳^{かざ}された手が弾かれるように彼女のもとへと戻っていった。

「はあ、はあ。」

「だ、大丈夫ですか？」

「はあ、はあ、はあ」

僕の問いに答えられない程疲弊している。

こんな彼女を見たのは初めてである。

そして、ようやく彼女は口を開くことが出来た。

「な、なるほどの。」

いや、いきなり納得されてもこっちは全く意味が分からないのだが…

「何か分かりました？」

僕がそう聞くと

「まず初めにお主…霊媒体質じゃ。それもかなり強力な。」

「れ、霊媒体質!？」

「そうじゃ。」

霊媒体質と言われてもあまりピンとこない。それを分かっているかのように続けて彼女は

「霊媒体質とは霊を呼び込む力のことじゃ。ようは、人の何倍も憑かれやすいということじゃの。」

「な、なんですって？」

「霊媒体質というても様々じゃが大きく分けると二種類あつての…」

「は、はい。」

僕はあまりの驚愕の事実に驚きつつも食い入るように話を聞く。

「一つは自分自身がそれに気付かず憑かれた事がわからんである奴、もう一方は憑かれたことがわかる奴、小僧の場合は後者じゃの。」

「それってつまり…」

「“見えて”いること、もしくは“感じる”ことが出来るということじゃの。」

「僕が霊媒体質…」

「じゃからこそこれだけ肉体と靈魂が別離の状態であっても、わずかながらその均衡を保っておるのじゃ。」

「じゃあやはり僕は…」

「かろつじてじゃが生きておるの。」

僕はその言葉を聞き歓喜の思いでいっぱいだった。生きている、僕

は生きているんだ。

「……そうか、だから“念”も……」

「うむ、生きておる限り“念”は小僧には届かぬ。」

良かった。僕は死んでも誰からも思いを寄せられない、どうしようもない人間じゃなかったんだ。涙が出そうになるくらい僕は喜んだ。しかし、その僕を見ているヨネさんが、言いにくそうに話始めたことに僕はまたもや愕然とすることになる……

困惑

「そう喜んでばかりもいられぬぞ。」

そうヨネさんは口を開く。

「!？」

「まだ話は途中ということよ。」

確かにまだ疑問に残る点が色々残っている。何故幽体離脱、しかも記憶まで失っていた経緯、あの親子に対する僕の行動…何よりあの夢…。

考えれば謎がいつぱいだ。

つい調子に乗ってしまった…

「す、すいません。続きをお願いします。」

僕は気を取り直し、ヨネさんの話を聞くことにした。

「次に話すのは、何故幽体離脱をすることになったかということじやが…」

「は、はい…」

僕は息を呑む。

「霊媒体質の人間の厄介なところは、引き寄せる霊が浮遊霊だろうが地縛霊だろうが、当人に選ぶ権利などないということにある。」

「……地縛霊……何となく話が見えて来たぞ。」

「……憑かれたんですね地縛霊に。」

「……そうじゃ。」

前に源さんとの会話に出てきたと思うが、地縛霊とは浮遊霊と違い霊でも生きた人間にでも悪影響を及ぼす存在であるのだ。下手をすれば憑いた人間の命すら奪うほどである。

「じゃが、お主は余程強い霊媒体質の持ち主で抗う術を自然と持ち合わせていたのじゃ。」

「ぼ、僕がですか？」

「地縛霊が霊媒体質の人間に憑く最も多くの理由とは、その靈魂を喰らうことなんじゃよ。」

「なるほど……それが死に至る理由ですか。」

「全てが全てというわけではないが、小僧に憑いた地縛霊はそうじやの。」

なんとも恐ろしい話である。

「じゃがの、お主はそれに堪え続けていたのじゃよ。」

「そんなこと出来るんですか？」

「うむ。地縛霊からの干渉を、わしらの専門でいう防障壁ぼうじょうへきという膜を身体の周りに張り防いでおったのよ。」

「ぼ、防障壁……？」

なんか話が飛躍し過ぎてついていけなくなりそうだ。

「霊媒師の術では基礎の基礎じゃから霊媒体質の人間ならば自然に出来てもおかしくはない。」

「は、はあ。」

「普通ならばそんな厄介な人間に対しては諦めて憑くのを止める場合が多い。それがお主が人より強い霊媒体質であるがゆえに憑かれやすくても、今まで無事に過ごせていた理由なんじゃが…」

「はい？」

少し言葉を濁らせた彼女に不安がよぎる。

「…夢を見たと言ったのう？」

ドクンッ

「は、はい。」

「夢の中の相手が彼女は…と言っておったの？」

「え、ええ…」

「ふう…」

ヨネさんは一度大きく息を吐き

「お主には娘がいての」

「…！」

「色濃くお主の体質を引き継いでおる。」

「ま、まさか…」

「そのまさかじゃ。幼いがゆえにお主のように耐性がないがの。」

「そんな…！そ、その子は？…娘はどうなったんですかつ！？」

僕は記憶がない。だから娘がいるといっても実感はない。

だが、いるとわかった以上、もし生きて戻り記憶が甦った時、娘がこの世にいないなどどれほどの悲しみに包まれるか…

そんな思いから取り乱した口調でヨネさんを問い詰めた。

「これ、落ち着かぬか。心配せずとも無事じゃよ。今は…じゃがの。」

「今は？どういことですか？」

「お主の魂を奪うことに時間と力を使うことを嫌った地縛霊は娘に標的を変えた。それに気付いたお主は、わざと奴に取り込まれたふりをし、こともあろうに自らの体内に封じようと試みたのじゃ。」

「そんなことが出来るんですか？」

「出来ぬこともない。が、防壁とは違い高度な技術が必要とする術で普通霊媒体質だからというだけで出来るものじゃないの。お主、世も世ならいい霊媒師となつたじゃろて。じゃが…やはり高度な技術を要する術であること、奴の力が思いの他強大であつたことにより、逆にお主の魂が取り込まれそうになつたのじゃよ。」

「簡単な話が負けたんですね？だから僕はこんなことに…。けど、じゃあ娘は何故無事なんですか？」

「取り込まれそうに…じゃ。取り込まれたらお主の魂にそんな自由などない。永遠に奴の一部となり成仏出来ず苦しみを味わうことになる。」

「じゃあ、一体…」

「まあ、相打ちと言えいいかの。すんでのところでお主は自らの魂を肉体より切り離すことにより、事無きを得た。奴はその時に力を消費し過ぎ娘を襲う力を失つたのじゃ。奴は最後に闇をお主の体内に残すことにより記憶を奪つたのじゃ。」

「次…邪魔をさせない為ですね？」

強張って聞く問いにヨネさんは一言

「そうじゃ…」

こうしちゃいられない！早くなんとかしないと娘が危ない！！

「ヨネさん！！お願いです、娘は今何処に？教えてください。」

僕はヨネさんに必死に訴えた。

しかしヨネさんは僕の記憶の話を続ける。

「この話、全てはお主から今日聞いた話と繋がるの。」

「わ、わかりましたから、それより今は…」

「全て繋がるんじゃないよ、全ての…」

「だ、だからそれより今は娘の…」

「気付かぬか？」

「ヨネさん、一体さっきから何が言いた…！！」

僕の顔を見て彼女は

「うむ。」

と、一言頷いた。

「あ、明日香！？」

行動

ドクンッ

胸の慟哭^{くう}が抑えられない…

ヨネさんの店を出てから数時間は経っただろうか。辺りは薄暗くなり始めていた。

あの後ヨネさんは、“明日香”ちゃんと“彼女”が僕の家族であること、地縛霊はまだ力が回復してはいないであろうということなどを僕に教えてくれた。

そして最後に二つ約束事として、暫く彼女達に近付かないことと、ここ二日の出来事は他言無用を僕に強要した。

反論したいとこだったけどヨネさんの言葉がやけに重くのしかかり、僕は黙って従うことにした。

まあ今日は土曜日で幼稚園も休みだし、あの通りをいつものように彼女達を通ることもないだろう。が、もし万が一その通りを彼女達が歩いていてはいけないと思い、僕は全く別方向をふらふらとさまよいながら、昨日から今日にかけておきた出来事を整理していた。

「竜ちゃん!!」

威勢のいい声で僕を呼び止めたのは

「源さん。こんばんわ」

「珍しいね、竜ちゃんがこんなところまでくるなんてさ。」

確かにいつもはあの近辺が僕の行動範囲で、この辺りにくることなんか滅多にない。

「何か難しい顔してたけど、どうかしのかい？」
「それが…」

僕はこれまでのいきさつを説明しようとしたが、ヨネさんの他言無用という言葉进行い出し、言葉を詰まらせた。

「?どうかしたのかい？」
「いや、ただ、いつも同じ場所ばかりふらつくのもそろそろ飽き^{きた}もので…」

源さんに悪いと思いつつも僕は咄嗟に嘘をついてごまかした。

「なるほどね。確かに同じ風景ばかりじゃ、そりゃ飽きるわな。」
「え、ええ…。だから暫くはこの辺りで過ごそうかと思ってます。」
「お?いつもの日課はどうすんだい？」
「それもさすがに飽きてきて…」
「はははは、ついに人妻との危険な恋心も興味が無くなっちまったか。」

「はは、ですかね。」
そう答えると、源さんは頷^{うなず}きながら

「そつかそつか。んじゃ暫くこちら辺りにいるといいさ。俺も大概この辺でぶらついてっからさ。」

「はい。お世話になります。」

親切に言ってくれる源さんに、嘘をついたことを心の中で詫びながら、僕は答えた。

「んじゃ、俺ちよつとヤボ用あるから行くわ。」

「はいわかりました。では、また。」

「あつ、その角曲がったところの公園に、ここら一帯の幽霊がよく集まって暇潰ししてっから、竜ちゃんも暇な時とか立ち寄るといいよ。竜ちゃんあんまり他の幽霊と付き合いがないだろ？これからは楽しくやんな。」

「ははは…じゃあ気が向いたら…」

そう言い残すと源さんは去っていった。

確かにこの半年、僕の幽霊の知人といえば源さん、そしてヨネさんと葵さんくらいなもので、他の人とは会釈程度なものでほとんど会話をすることがない。

（よし、ちょっと立ち寄るかな）

もしかしたら何かしらあの地縛霊の情報が聞けるかもしれない。どれだけ低い可能性だろうが、今はそれに賭けたい。ただじつとなんかしてられない。

僕の足は自然と公園へと向かっていた…

出会い

源さんと別れた後、すぐに角を曲がり公園へと足を運んでいた。

（ここか…思ったより大きいな。）

意外と広い公園に少し驚きつつも、僕は中へと入っていった。もう辺りは薄暗くなってきたているが、中にはまだ遊びに夢中な子供や犬の散歩に来ている人などでそこそこ賑わっていた。

（けどなんて話そうか？いきなり地縛霊いましたか？と核心を突こうか…いやいや、それはいくらなんでも唐突過ぎるな）

あれこれ考えながら歩いているが、なかなかいい案が浮かばない。そのうち公園内に一角だけ人が寄り付かない場所へとたどり着いた。別に端の場所でもないがそこには明らかに人が近付かない。まあ代わりに目的の方々はいらっしやるが…

（あそこだな。）

僕は一呼吸置き、その場所へと歩み寄る。

「こ、こんばんわ。」

少し上擦った挨拶になった僕の顔を一斉に皆が見た。

「お、見掛けない顔だね。新入りかい？」

一人の男性がこう語りかけてきた。見た目は源さんとそう変わらな

いわゆる中年男性である。

「はい、いや、いいえ、この姿には半年程前から…」

完全に緊張のあまりしどろもどろになってしまった。

「へえーそうなんだ。初めまして。」

隣の女性が軽く会釈をしてくれた。

「初めまして。」

僕がすぐに挨拶仕返すと、さらに違う男の幽霊が僕に手招きをしなから

「まあ、堅苦しい挨拶は抜き抜き。こっちに座るといいですよ。」

と、あっさり僕を受け入れてくれた。

「じゃあお言葉に甘えて…」

僕は彼の言葉に従い、彼等の座っている所に加わった。

どうやら今日はこの三人だけのようだ。

「じゃあ、名前も知らないのもあれだから自己紹介しますか。僕は
高木 卓也と言います。幽霊歴三年くらいです。」

招き入れてくれた彼がこう切り出した。

「お、じゃあ次は俺だな。三浦 大輔、幽霊歴十年!!」

「私は南 香織、五年くらいかしらこの姿…よろしくね。」

「朝倉 竜太郎です。さっき話したように、半年です。」

まあこんな感じで、お互いの自己紹介が終わったところで三浦さんが

「ああ、確か源さんの知り合いだよな？竜ちゃんと呼ばれてないかい？」

「あ、そうなんです。ここもさっき源さんに紹介されて…」

「あら、そうなんだ？源さんの知り合いなんだ。」

「なるほど。」

みんな納得の表情をしている。

「やっぱ皆さんも知り合いなんですね。」

僕がこう聞くと三浦さんが

「そりゃそうさ。ここらじゃ、源さんを知らない幽霊なんていないよ。」

「ですね。この辺りじゃ大御所て感じですね。」

「ふふふ、後はヨネさんとね。」

なるほど。源さんとヨネさんてやっぱり有名みたいだ。

「いつも三人でこちらに集まっているんですか？」

僕がこう聞くと急にみんなの顔が曇るのに気付いた。

「いや、まあ…」

三浦さんが曖昧あいまいな返事をする和高木さんが

「以前は十人くらいはいたんですけどね。」

「へえー、そうなんですか。けど、なんでまたみなさんいなくなっ
たんですかね？あつ、ひょっとして成仏なさったとか？」

僕がそう言つと、三人で顔を見合わせて少し目配せした後、三浦さ
んが口を開いた。

「源さんには口止めされてんだけど、どうもそうじゃないみたい
なんだ。」

「？どういうことですか？」

「初めのうちは、俺達もそうだと思ったよ。だがね、その中にはま
だ未練が残っている奴もいたし、これはおかしいってなったんだよ。」

まさかつ！僕の鼓動が一気にはやくなる。

「それって…つまり、地縛霊の仕業ってことですか？」

僕が核心を突くと

「おそろくね…」

と、三浦さんが答えた。これは願ってもない展開だ。どう切り出そ
うかと思っていた話が、まさかこんなに簡単に聞けることになるう
とは。

「いや、でもそうと完全に決まった訳でもないんですけどね。」

横から高木さんが口を挟んだ。

「そうよ。見た訳じゃないんだから…」

南さんも高木さんにあいづちを打つようにそう答えた。

「そりゃそうだけどさ。こりゃやっぱおかしいよ。いくらなんでも、ここ二ヶ月で七人もいなくなるのはさ。」

「そうですけど…」

三浦さんの強い語気に少し戸惑った感じで返事する高木さんにさらに続けて

「それに、ここ以外でもこの一年でここら辺りの霊が不自然なくらい減ったじゃないか。やっぱ、地縛霊だよこれは。」

完全に決めつけにかかった三浦さんに、南さんが釘を指すように

「ちょっと落ち着いて。それを確かめる為に、今源さんが、ヨネさんに調べてもらってんじゃない。」

と、なだめた。

「まあ…ね。」

三浦さんはそう答え、冷静さを少し取り戻し

「いや悪い悪い、ちょっと熱くなり過ぎちゃった。」

と、頭を下げた。

そのやり取りを聞いていた僕は昨日のことを思い出していた。

確か源さんは、ヨネさんの所で別れ際に別件があると言っていた。
おそらくこのことであろう。

「まあ朝倉君も一応気をつけた方がいいよ。あまり一人にならないようにね。」

「はい、なるべくここにも顔を出すようにしようと思つのですがいいですね？」

「こちらこそ大歓迎ですよ。仲間が増えるのは楽しいですから。」

高木さんがそう言うと、二人も頷いた。

「寢床もこの公園を使うといいよ。俺達もここで寝てるから。その方が安心だろう。」

「ありがとうございます。お言葉に甘えます。」

その後僕たちは、暫く話し込んだ後、それぞれ寢床へと別れていった。

僕も適当な場所を見つけ寝ようとしたとき、ふと疑問を抱いた。

（待てよ……もし源さんがあの時、ヨネさんにこの話をしたのなら、僕に今日ヨネさんが話してもよさそうなんだけどな。まあ……いいか。）

あまりに色々とあり過ぎた今日の出来事に疲れた僕は、取りあえず眠りに就くことにした。

急転

僕は今、駅の方へと空から向かっていた。

歩いても良かったが、日曜の昼前ということもあり、駅前の商店街は多くの人で賑わっている。

もしかしたら、あの二人にも遭遇するかもしれない。それは危険と感じ空からのルートを選んだのだ。

行く先はもちろんヨネさんの店である。昨日あれから、地縛霊のことはあれ以上触れないでいた。不安を煽ることになるし、源さんがヨネさんに相談してるのなら、ヨネさんに聞くのが一番だと思ったからだ。

もし、内密に話が進んでいるにしても、三人から話を聞いたと答えれば、もしかしたら何か教えてくれるかもしれない。

空は空いていることもあり、難無くヨネさんの店へと到着した。中へ入ると、ここのもう一人の店主の姿があった。

（珍しいな日曜なのに）

普段は日曜がこの店の休みであり、店主がいることなどはないのだけど。まあ、それほど気にすることもないので玄関から

「こんにちはー！朝倉ですけど。」

と、大きな声で呼んでみた。その時、一瞬店主の体がピクリと反応したように見えた。だが別に、その後どうとした反応はない。

（気のせいかな…）

「はーいっ！」

二階から葵さんの返事が聞こえ、階段から葵さんが降りてきた。

「こんにちは竜太郎さん。」

「こんにちは。ヨネさんいるかい？」

「はい、いらつしゃいますよ。けど今日は、お店の方はお休みなんですが…」

「ああ、ちょっと話をしに來ただけで、見てもらいに來た訳じゃないんだ。もともと払う“念”もないしね。」

店は休みだが、ヨネさんと葵さんはここに住んでいるのだ。

「そうですか。ではこちらにどうぞ。」

そう言い、彼女は僕を二階のいつもの部屋へと案内した。階段を上がりしなに店主の方に目をやるが、あれから変わった様子もなく、何か店の品をあさっている。

（やっぱり気のせいかな）

そう思い、二階の部屋の前まで足を運んだ。

「ヨネさん。竜太郎さんが来られていますか…」

葵さんが話し掛け始めるや、すぐにヨネさんが部屋越しに

「あれだけ大きい声出されれば、嫌でも聞こえるわ。入るがよい。」
と、答えた。

「失礼します。」

そう言つて僕は部屋の中へと入った。中に入ると、何やら自分の“念”で出したのであるとか、ヨネさんは商売道具のようなものを手入れしていた。

「今日は何用じゃ。すぐに話が事運ぶものでもないぞ。」

「い、いや別に僕を見てもらいに來た訳じゃないですよ。ちょっと話を聞きに來ただけです。すぐ帰りますから…」

やはり睨まれると、萎縮してしまう情けない僕がいた。まあヨネさんにかかれれば皆そうだろうけど…。

「して、話とは？」

「もしよろしければ、源さんから聞いている、最近この辺りの霊の失踪についてお聞きしたいなと思って。」

「失踪？」

「はい、一年程前からかなりの数の霊が姿を消したらしいんですよ。昨日知り合つた人達から聞くと、もしかしたら地縛霊の仕業じゃないだろうかと噂していました。そこで、源さんが代表してヨネさんにそのことを相談してみることになつたと聞いたので、話を聞きにきたんです。」

「わしは何も聞いておらぬがな。」

やはり内密なのだろうか。そこで僕は

「てつきり一昨日の別れ際に、源さんが言つた別件でこのことだと思いましたよ。」

と、切り出してみた。

「一昨日？」

「いや、まあ内密な話ならこれ以上は聞きません。もし、僕の件と関連がありそうならちよつと聞いてみたかったですただけなので。」

教えてくれそうもないヨネさんに素直にこう話した。
すると、ヨネさんはなお不思議そうに言った。

「小僧や、話がまるで見えぬ。わしは源からそんな話は一切聞いておらぬぞ。一昨日というが、それほど大事に至る話なぞしておらぬ。」

「えっ？だって…」

僕が驚いた顔でこう答えると、ヨネさんが話を続ける。

「それにの、ここら辺りの霊圧はある程度把握しておる。それだけ霊の数が減ったのであれば、誰に言われなくともわかるがの。」

「でも確かに昨日、話を聞いたら少なくとも二ヶ月の間に七人の霊がいなくなつたと…」

「むう。おかしいのう。」

おもむろにヨネさんは窓を開け、空を見上げた。そして暫くの間、遠くを見るように眺めている。

「っ…!!」

突然ヨネさんの顔色が変わった。

「やられたわっ！」

明らかに怒りをあらわに声を荒げた。その後ヨネさんは手を胸元に組み、何やら呪文のようなものを唱えている。

「解印っ！！」

そう叫んだ瞬間、イカツチのような轟音が辺りに響き渡った。

ザワツザワツ

外の通行人が慌ただしい。どうやら普通の人間にもこの音が聞こえらしい。

「どうなさいましたっ！？」

慌てて葵さんが、部屋へと入ってきた。

「わしとしたことが…迂闊じゃったわ。」

「い、一体どうしたんですか？」

何がなんだかわからない僕は、ヨネさんに驚いた様子で尋ねた。

「この建物の周りに結界が張り巡らされておったのじゃよ。」

「けっ、結界？」

「わしが滅多なことでは、ここから出ぬことを知つとる奴じゃの。これにより、わしのこの辺りの霊視を狂わしておったのじゃ」

「な、なんですって？」「しかもこの結界…」

そう言い残すと、また空を見上げ黙ってしまった。何か重苦しい空気に包まれた部屋の中で、僕と葵さんは息を呑み、ヨネさんの行動を見守った。

「小僧、これは思ったより事態は深刻かもしれんな。」

突然ヨネさんが口を開く。

「どういことですか？」

「急がねばなるまい。お主と子に、危険が迫っておるかもしれん。」

「な、なんですって？ そんな……けど、じゃあ、一体急ぐってどうすればいいんですか？」

「お主と娘の身の安全を確保せねばなるまい。」

「そんなのどうやって確保するんですか？」

「護符を持たず。お主には病室に、娘には常備してもらつ。」

「護符つて、お礼みたいなものですか。」

「うむ。ただ、わしの“念”で作つた護符では、時間が経てば、さらにわしからある程度離れてもその効力を失う。現存の護符が必要じゃ。」

「そんなもの一体何処に？ あつたとしても、それを渡すなんて無理ですよ。」

「方法はある。」

僕の問いにこう答えたヨネさんは、ドアの前まで歩き

「ついてこい。葵もじゃ。」

と、言った。

『は、はい。』

方法があるとは一体……。だが今の僕は、ヨネさんの言われるまま従う他なかった。

希望

ヨネさんの言われるままに、僕と葵さんは部屋を後にした。

これから何処に向かうのだろうか？方法とは一体…。必死に不安と焦りに耐えながら、ヨネさんの後を付いて階段を下りた。

一階に着くとヨネさんの足取りが止まった。

そして、驚くべき言葉を発したのだ。

「ここじゃよ。」

！？あまりの唐突なヨネさんの言葉に、僕と葵さんはおもわず顔を見合わせた。

「着いたって…一階に下りただけじゃないですか。」

僕が言うと、葵さんも

「そうですよ。一体何をおっしゃるんですか。」

僕たちの意見はもつともだ。ここには、相変わらず店主とまがいものに近い商品が置かれているだけである。

悪い冗談だと思っていると、ヨネさんがその商品の数々を一通り見渡した後に

「これじゃの。」

商品の置かれている一角に立ち、こう言った。

僕たちもその場に行き、ヨネさんの見る方へ目をやると、そこには確かに札のようなものが置かれていた。しかし、この札がヨネさん

の言う護符だというのか？

こんな場所に殺伐と置いてあるものが、本当にそんな重要なものだなんて、僕には思えない。

「本当にこれが護符だと言うんですか？失礼ですけど、とても信じられません。」

僕はそのまま思ったことを口にした。

「まあ小僧の言いたいことはわかる。じゃが、信じる信じないも、こんな場所にあるこの護符が、小僧らにとって今必要なものであることは間違いない。それとも、そんなにわしが信じられぬか？」
「いや、別にそういう訳じゃ……」

ヨネさんが強い口調でこう言うので、仕方なく僕は引くことにした。

「それでヨネさん。これが護符なのはわかりました。けど、ここからどうなさるおつもりですか？私達が持ち運ぶ事なんて出来ませんよね？」

葵さんがこう聞くとヨネさんは

「うむ。むしろが運ぶのは不可能じゃの。誰かに事情を説明して、運んでもらうしかないの。」

と、答えた。

「事情を説明と言いますけど、それってつまり僕達と会話が出来る人を見つけないといけない訳ですよ？何かアテでもあるんですか？」

不安げに僕が聞くとヨネさんはあっさりと言った。

「アテも何も、ほれ、そこにいるではないか。」

……は!?

ヨネさんはそう言つと、部屋にいる店主を指さした。

「えーつと、僕にはこの店主しか見えないんですけど……」

「うむ。わしにもじやが?」

どうやら本気のようなのだ。

「待って下さいよ。この人靈感ないでしょ? 現に今、僕達が見えてないじゃないですか。」

そう言つた後、ふいに僕はここに訪れた時のことを思い出した。

(いや、けどまさか……)

すると、おもむろにヨネさんは彼の方へ歩み寄り、突然大声を出した。

「いい加減に認めぬかつ!」

「うわっ!」

その瞬間店主は、余程驚いたのだろつ、大声を上げ椅子からのけぞつた。だがそれ以上に驚いたのが、僕と葵さんである。

「りゅ、竜太郎さん、今の……」

「あ、ああ。」

今度は見間違いじゃない。明らかに店主は、ヨネさんの声に反応したのだ。

「な、何も聞こえない。空耳空耳……。」

必死に否定しようとする店主に、さらに追い討ちをかけるようにヨネさんは

「空耳なものか！！ほれ、もう大声上げずとも聞こえるじゃろう？」
「やめてくれ、俺は食っても旨くないよ。ほ、他をあたってくれ。」

おいおい、何だか可哀相に見えてきた。だがヨネさんは、ここぞとばかりに畳み掛ける。

「情けないのう。己の力であろう。きちんと向き合わんか！！」
「本当に勘弁してくれ。」

あまりに見かねた葵さんが割って入る。

「まあまあ、ヨネさん。少し落ち着いて下さい。」
「うわっ、今度は違う声っ！」

葵さんの声にまた店主は驚いた。
どうやらもう完全に聞こえるらしい。

「す、すいません、驚かすつもりじゃなかったんです。」

ご丁寧に葵さんは、そんな店主を見て頭を下げた。

「そんなのいいから早くどこか行ってくれ。」

店主はもう何がなんだかわからない様子で、顔色は真っ青だ。

「そういう訳にはいかん。お主にはしてもらわないといかんことがあるからの。」

「そ、そんなつ。命だけは、命だけは…。」

「たわけっ！貴様の命なぞ何の価値もないわ。」

「じゃあ一体何をすれば消えてくれるんだ。」

「ほほうっ。少しは話がわかるようだったみたいじゃな。」

「そうしないと消えてくれないのなら、しかたないからだよ。」

店主は半ば諦めたように言った。

「わかればよい。小僧、出番じゃ。」

なかなか話に入れないでいた僕にヨネさんが突然声をかけた。

「あつ、はい。」

慌てて僕は店主の方へ近付いた。と言っても、どう切り出そうか…

「あの、こんにちわ。」

「うわっ。まだ違う奴いたのかよ。」

店主は僕の挨拶に対しこう答えた。どうやら声は聞こえても、姿は見えないらしい。

「…この声、あんたさっきでかい声で叫んでた奴だな？」

さつきとはここに来た時のことだろうか？

「はい。どうもすみません。」

僕は何故か謝ってしまった。

「さつきから謝るなら、みんなどっか行ってくれよ。はぁ…で、一体あんたら俺に何がして欲しいんだ？」

大分今の環境に慣れたのか、店主は少し落ち着きを取り戻した感がある。

「まず、僕は生きている所から話さないといけませんね。」

「なんだって？」

店主は驚いた様子で聞き返す。同様に葵さんも驚いたようだ。どうやらヨネさんは、このことを言わずにいたみたいだ。僕は構わず今までの経緯を説明した。一通り話終わると、店主は困った顔でこう言い出した。

「事情はわかった。だけどそれには大きな問題があるよ。」

「問題？」

思わず聞き返す。

「俺がその護符とやらを持っていったとしようか。誰がこの話を信じるんだい？」

！！言われてみればそうだ。失礼だがどこから見ても彼は怪しい人にしか見えない。不精髭にボサボサ頭、しかも話す内容がオカルト

とくれば申し分ないが誰も信じる訳がない。

「いや、そうとも言い切れぬ。」

ヨネさんが口を開く。

「小僧の伴侶なら信じるかもしれんな。」

そうか。僕の妻ならば僕が霊媒体質と知っているかもしれない。それならば、こんな有り得ない話でも信用してくれるかも。

「まあ、取り敢えず行くか。その代わり用件が済んだら俺に二度と近付かないでくれよ。」

こうして僕達は、店を後にしたのだった。

病院

ドクンッ

店を出てすぐに、僕はまた胸の慟哭を感じた。何か僕が僕じゃ無くなるような気がして、少し怖い。だが、今はそんなこと言っている場合じゃない。とにかく早く彼女達を探さないと。

「で、店を出たはいいが何処を探すんだ？」

店主が小声で僕らに話し掛けた。

「取り敢えずいつもの道から探そうかと思います。そこから病院に立ち寄ってみようかと…。」

「なるほどな。もしかしたら見舞いに来てるかもしれないからか。」

「はい。」

駅前のスーパーから幼稚園までの道のりを歩き、病院近くまで来た時

「いますかね。」

葵さんが心配そうに呟く。

「まあ運次第だな。」

店主が答えた。しかし、店主もさっきまでとは違い、落ち着き払ったものである。

この会話の後、すぐに病院へと辿り着いた。

入口の前で店主が一呼吸して

「おしっ！行くか」

と、一言言つと中へと入った。後ろを着いて続けて僕らも中へと入った。ふと、さっきから静かなヨネさんを見ると、少し顔つきが違うのに気付いた。何か険しい表情をしている。

「ヨネさん、どうかしましたか？」

僕が小さくこう聞くと

「いや…なんでもない。」

とだけ、答えた。

（やっぱり様子がおかしいな）

だがこれ以上聞いても答えてくれそうにないので、気になりつつも触れないでいることにした。

院内の受付場所で、店主は面会案内を聞いている。

「申し訳ありません。朝倉さんの面会は、ご家族だけとなっています…。」

「えっ！？そうなの？そこを何とかならないかな？5分でいいんだ。」

「そう言われましても規則ですの。」

「まいったな…。」

店主は頭を抱えている。その横へ葵さんが近付き

「それなら、今ご家族の方がいるか聞いてみてはどうですか。」

と、助言した。

「なるほど。」

「は？」

思わず葵さんに返事した店主に應對している看護師が不思議そうに見ている。

「いやいや、あつ、彼の家族の人誰か今面会中かな？」

「はい。奥様とお子様がいらっしゃってますが。」

やった！！これは運がいい。これなら事情を話して僕の部屋にも護符が置けるし、明日香ちゃんにも渡せる。

「じゃあちよつと呼んでもらえないかい？せつかくだからお見舞いの品を渡したいんだ。」

店主が上手いことこう言うと、

「かしこまりました。少々お待ち下さい。」

そう言うと、看護師は奥の内線を掛け出した。

恐らく僕の病室のフロアに連絡を取っているのだろう。

「なんか緊張してきましたね。」

小声で僕に葵さんが言う。無言でその問いに頷くと、看護師が電話を切り

「今こちらの方へこられるそうです。そちらの外来用の椅子に座られてお待ち下さい。」

「ああ、わかった。ありがとう。」

椅子に座る店主も少し緊張気味だ。それはそうである。見ず知らずの人に、これから有り得ない話をしないといけないのだから。そう考えると少し申し訳ない。相変わらずヨネさんはだんまりを決め込み、顔は険しいままだし…。

ドクンッ

！！まただっ！胸が苦しい！さっきより酷い。

僕の異変に気付いた葵さんが

「だ、大丈夫ですか竜太郎さん？急に顔色が真っ青ですよ。」

「あ、ああ大丈夫。」

今はそれどころじゃない。僕は必死に作り笑顔で答えた。その時である。

「来た。」

僕が言うと、一斉に皆階段の方へ目をやる。

「あの親子か。」

「はい、そうです。」

僕がその問いに答えた時、向こうがこっちに気付き軽く会釈をした後、近付いて来た。店主も会釈仕返し、立ち上がって彼女達を迎え

る。

「あの、初めまして。主人の見舞いに来て頂いたそうで。朝倉の妻です。」

丁寧に店主の前で彼女が頭を下げた。ヨネさんからは聞いてはいたが、いざ本当に僕の妻と言う彼女を見て、何かむず痒い気持ちになった。

「綺麗な方ですね。」

葵さんが僕にこう言った。

「あ、ああ」

一度幼稚園での件で見たが、ここまではっきりと彼女の顔を見るのは初めてである。

「こちらこそ初めまして。わざわざすまないね呼び出したりして。」
「いえ気にしないで下さい。あつ、娘の明日香です。ほら、挨拶は？」

「こんにちわ」

「偉いね。こんにちわ明日香ちゃん。」

「あの、わざわざ来て頂いたのにすみません。主人の面会は家族だけらしくて。なにぶん半年間あの状態ですので…。それでご用件とは？」

「それなんだが…」

店主は言葉を詰まらせる。少し考え込むようにしている店主を彼女は不思議そうに見ている。

「あの？」

「いや…まあ…何と云えばいいのか…」

僕達は固唾^{かたず}を呑んで見守るしかない。店主は覚悟を決めポケットから護符を取り出した。

「これを渡したくてね」

「これは？」

彼女は不思議そうに護符を見つめた。

「旦那と娘さんに持たすよう言われたんだ。」

「これを…ですか？一体誰に？」

ついにこの質問がきた。店主が一つ深呼吸して

「その…旦那に頼まれたんだ。」

「！！」

一瞬にして彼女の顔つきが変わる。

「何を言ってるんですか？失礼ですけど私達を馬鹿にしにきたんですか？」

怒りに満ちた声で店主に問う。

「とんでもない。事実を言ってるだけだよ。」

「ふざけないで下さい！！」

まずいっ！！かなり感情的になってる。

「店主さん。僕の霊媒体質の話を…」

「わ、わかった。」

「わかった？何がわかったですかっ！」

「いや、あんたに言っただんじゃないよ。」

「じゃあ誰に言っただんですかっ！！」

「旦那だよっ！お宅のね！」

「！！」

ついに店主も声が荒らげる。

「何を…」

「いるんだよ今！俺の後ろに。旦那さん霊媒体質違うか？」

「！！」

店主の質問に彼女が驚きの表情をした。

「ど、どうしてそれを…」

やっぱり彼女は僕が霊媒体質であることを知っていたみたいだ。

「ママ、喧嘩？」

明日香ちゃんの言葉に二人が我に帰る。

「いや、そうじゃないのよ。」

「…聞く気になったかい？」

「え、ええ。」

店主は僕達に聞いた事情を隈なく説明した。僕がこうなった経緯、今僕と娘に危険が迫っていること。一通り聞き終えた後、彼女は口を開いた。

「じゃあ、今そこに竜はいるんですね？」

「ああ、姿までは俺には見えないが確かにいるよ。」

僕は竜と呼ばれているのか。

「明日香を守る為にこんなことに…」

「そして今また危険が迫っているんだ。だから急がないと。」

「わかりました。あなたを信用します。すぐに竜と明日香に護符を持たせます。」

良かった。何とか上手くいった。

「良かったですね竜太郎さん。」

「ああ、店主さんありがとうございます。」

「お礼よりとにかく急いだ方がよくないか？」

「そうですね。ヨネさん行きましょうか。」

おもむろに後ろに振り返るとヨネさんの姿がない。

「あれ？ヨネさん？」

「さっきまでいたのに…」

「どうした？」

異変に気付いた僕達に店主が聞いてきた。

「ヨネさんがいないんです。」
「なんだって？」

何だろう…胸騒ぎがする。

「彼女に急ぐよう伝えてもらえますか？」
「わ、わかった。」
「どうしました？」
「旦那が急いで病室にそれを持って行けと…」
「竜が…？わかりました。すぐに戻ります。」

そう言うと言符を受け取り彼女達は病室に向かった。

「僕達も行く。」
「は、はい。」
「おいおい俺は？面会は家族だけなんだろう？」
「店主さん有難うございました。お礼はまた後でゆっくりさせてもらいます。」
「ちょ、ちよつと…」

店主の話を聞く間もなく僕達は病室へと向かった。
何か得体のしれない胸騒ぎを感じながら……

真相

304号室 朝倉竜太郎

僕の病室である。胸騒ぎがした僕は彼女達の後を追ひ病室へとたどり着いた。中へ入ると彼女達と…あれ？誰だろうか？黒い着物姿で三十代くらいの黒々とした長い髪を束ねた綺麗な女性がそこにいた。黒い着物姿で三十代くらいの黒々とした長い髪を束ねた綺麗な女性がそこにいた。その視線の先には…っ！！源さん！？

「ヨネさん！！その姿になられるなんて…」

突然葵さんが声を上げた。

「ヨネ…さん？まさかこの人が？」

「はい。ヨネさんの本当の姿であり、除霊するときの姿なんです。」

「なんだって？」

ヨネさんだというのにも驚いたが、それよりも除霊する姿という言葉に僕は更に驚いた。

「そつだよヨネさん、悪い冗談は止めてくれよ。」

源さんの問いにヨネさんは答えようとしない。

横にはそんな状況を知らない彼女達が横たわる僕に護符を付けている。

「源よ、これまでじゃ。お主ではあの護符の力には勝てん。」

ヨネさんがついに口を開いた。

「だから何を言っただよヨネさん。俺はたまたまここに来ただけだよ。」

「たまたま？」

僕が聞き返すと

「そうだよ竜ちゃん。暇でそこいらブラブラしてたら、彼女達見つけてさ。何となくつけてみたら、びっくり竜ちゃんがいるじゃないの。もう本当驚いてさ。」

「ほう…ならば源よ、今小僧に触れてみるがいい。」

源さんとの会話にヨネさんが割って入る。

「これでパパ良くなるの？」

「いいえ、でもねパパが早く良くなるようにっていうおまじないみたいなものよ。」

「へえー、効くといいな。」

「さっきの人のトコ戻ろうか。まだママお話しなといけないから。」

「うん、わかった。」

ガチャ バタンー！

彼女達はどうやら店主にまた会いに行ったみたいだ。おそらく僕の事について聞きに行ったのだろう。

「さ、触るって竜ちゃんにかい？何で俺がそんなことしないといけないんだよ。」

「出来ぬであろう。その汚れた魂ではな。」

「っ！！！」

（汚れた魂？）

その言葉の後、源さんは押し黙ってしまった。

「どうしたんですか源さん？ヨネさんもさっきから一体何を…。」

「小僧、お主がこうなった元凶じゃよ源は。」

「な、なんですって！？何を言ってるんですかヨネさん。源さんも黙ってないで何か言ったらいいじゃないですか。」

「……」

「源さん？」

僕の問いに源さんは尚、黙ったままだ。

「おめおめと騙されたわ。」

「ふっ…ふっふっ…あーはっはっはっはっ…！」

突然、源さんは高笑いを挙げた。

「げ、源さん…。」

「いや、悪い悪い。あまりにもおかしくってさ。そうだよ、俺が全ての元凶ってやつだわ。」

開き直った口調で源さんは語り始めた。

「いやー、まさかここにきてばれるとはな。竜ちゃんも知らない方が自分の為だったのに。」

「嘘でしょ？源さんが元凶だなんて…。だってほら、僕の為に念を使ってくれてまで…」

「竜ちゃんの為？はっはっはっ、めでたいなお前は。」

「!!」

源さんの口調が変わりだす。

「誰がお前の為にやるかよ。全ては俺の為さ。ああやれば不自然なくあの場所に定期的に行けるからな。」

「結界じゃな？」

「そうさ。あんたの目を欺くには少しずつ張る必要があったからな。用もないのに何度も行きや、疑われかねないからな。そこで考えた訳よ。俺の闇で記憶を失ったお前を使えば、定期的に結界を張りに行ける。しかも闇があればヨネさんよ、あんたの気もそらせる。まさに一石二鳥てな訳さ。」

言葉が出ない。こんなことって……。

ドクンッ

また胸が…

「さて…と、種明かしも済んだことだし、そろそろ行っていいかな？」

「それで済むと思っておるまい。」

「ははは、冗談だよ。ヨネさんよ、俺がここにいる理由わかるだろう？」

そう言うや否や、源さんの姿が驚きの変貌を遂げる。初めて見る、地縛化だ。口は裂け、そこから見える歯は鋭く、腕は四本、その手も爪先が剣のように尖っている。

「ははははははは!! 竜太郎!! お前との戦いで失われた力もこの

通り！！いや、あの時よりも更に力が漲みなぎってるよ。」

ドクンッ

竜太郎：あの言い方に僕は覚えがある。

「源、貴様何人喰ろうた？」

瞬間、源さんが僕の目に追えぬ程の速さでヨネさんと交錯する！！

ブシュツウ！

交錯して離れた後、ヨネさんの肩口から血しぶきが：！！

「覚えてないね何人喰ったなんぞ。喰いたくなったら喰うの繰り返しだわ。浮遊霊は力もそんないらないから喰うのは楽なもんさ。」

さっきの問いに、爪先に付いた血のりを舐めて答えた。

「何故じゃ源。何故そこまで堕ちた？」

「はっ、五十年やってりやさ、真面目にやってんのが馬鹿らしくなってるね。だってそうだろう？日が経つにつれ集まってくる“念”が少なくなる。ここ数年なんざ酒を出すのも一苦労さ。」

「当然じゃ。貴様にゆかりのあった者もいずれは土に還る。後世に渡れば先祖の一人として“念”が送られるのは必然じゃろうが。」

「だが、どうだい？魂の旨いこと旨いこと。酒の比じゃないね。しかも簡単に手に入る。病み付きになっちまったよ。ところが竜太郎、お前のせいで力を一時とはいえ失い、どんなに辛かったか。あんなご馳走前にして、指くわえて見てるだけなんてよ。」

ドクッドクンッ!!

「うつ…」

僕は慟哭が抑えられず胸に手をやる。それどころか頭まで何かおかしくなっている。

「う、うわあああつ!」

「竜太郎さんっ!大丈夫ですか?しっかりして下さい。」

「はあはあはあ…」

ああそうか。そうだった。思い出した全て…。あの日あの時のことを。

「明日香は渡さない。絶対に!」

「…記憶が戻ったか。」

ヨネさんの問いに僕は答えた。

「はい。“俺”と“奴”の因縁も全て思い出しました。」

「はんっ!!今更どうだって言うんだよ。渡さないだと?今のお前に何が出来る。笑わせるっ!」

「許さない!!あんただけはっ!」

今にも飛び掛かろうとする勢いの俺に、ヨネさんは割って入った。

「小僧、気持ちはわからんでもない。だが奴の言う通り、今のお主にはどうも出来んよ。下がっているがよい。」

「でも…。」

「源よ、もはや救えぬのう。」

「おいおい、あんただって何が出来るんだい？あんたの底はさっき
ので見えたよ。」

「底？」

ズドンッ！！

そう言うや否や、ヨネさんが右手に持った杖を奴に向けた瞬間、音
と共に胸の辺りに向こうの景色が見える程の穴が開いた。

「えっ…！？」

一瞬何が起きたか理解していない奴にヨネさんは

「お主にわしの底なぞ見せた覚えはないがな。」

「が…はっ…」

奴は崩れ落ちるように方足をついた。

「ヨネー…っ！！」

ブオンッ

怒り狂った奴が叫んだ口、四本の爪先から、黒い光体のようなもの
ができ、そこから線上の黒い光が中央に集まり更に大きな黒い光体
となり、ヨネさん目掛けて発射された。

ドッッッ！！！！

「…外障壁」

ズシャアア！！

そう言ったヨネさんの前にガラスのような透き通った壁ができ、奴の放った黒い光体はその壁の前で四方に飛び散った。

「…ば、馬鹿なっ！」

その光体の最期を見届けた奴は啞然とした顔をしている。

「終わりじゃ源。」

「まさかここまでとは…。ごふっ！！！」

もはや奴にはこれ以上戦う気力が残っていないみたいだ。それほどヨネさんの力の差が歴然としている。奴の力は正直半年前のそれとは比にならない。“念”の持たない今の自分はもちろん、半年前の俺であったとしても、相手にならないだろう。その奴を全く寄せ付けないヨネさんは次元が違う。これが霊媒師の力というやつか。ともあれ、これで元凶が断たれた。少し安心した俺だったが、まだ終わりではないという現実を突き付けられることになる。

「源よ…店に張った結界誰に教わった？」

「っ！！！」

「結界？」

俺が聞き返すと

「うむ。あの結界…あれはわしの術と同系統、源に教えたことなどない。つまりあの結界を教えた者、今回の一連の件に黒幕がいるということになる。」

「なんですって!？」

どういうことだ？黒幕？それは一体どういうことなんだ？一つ言えることはまだ全てが終わった訳ではないということだけははっきりしていた。

黒幕

「はっはっはっ、あんたの言う通りだよ。」

奴が口を開いた。

「誰かなんて、あんたが一番知ってるんじゃないのか？」
「やはりか…」

その時である。病室が突然重苦しい空気に変わった。悪寒というものだろうか、例えばようない感覚…俺だけではないらしい。

「な、何この感じ…」

葵さんがそう言い、ヨネさんは

「来おったか!!」

と、身構えた。

「はーっはっはっ!! 終わりだ、お前らみんな終わりだっ!! はーはっはっはっ!!」

何だ？何が来る？そう思った瞬間、奴の横の空間が裂けた!!

ズズツ!!

何と裂けた空間から一人の男が出て来た。誰だあれは？その見た目は鬚まゆを結むすっていて甲冑かこうを着こなし、鼻下には髭ひげを生やしている。昔

の武士の霊だろうか？

この男が黒幕なのだろうか。何ていう威圧感だ。背中に冷たい汗が
滴り落ちるのを感じる。

「おおっ！！よく来てくれました。助かりましたよ。」

奴がその男に話し掛けた。

ガパッ！！

奴の問いに答えることなく、突然男の甲冑が大きく開いた。中はま
るでブラックホールのように奥が見えない。

「えっ！？」

ブオオオオオツ！！

その甲冑の中に奴が吸い込まれる！！

「そ、そんなっ！！待ってください！！何故こんなっ！！う、うわ
ああああっ！！……」

ガチンッ！

奴を吸い込んだ後、また甲冑は閉じてしまった。

「久しいのうヨネ。四百年振りになるか。」

「…お久しぶりにございます、お館様…」

！！二人は知り合いなのか！？

ガチャ

その時ドアが開き店主が病室に入ってきた。

「な、何だこりゃ!!」

店主が声を上げる。

「あ、あんたらあの霊達かよ？」

「!!!み、見えるですか？」

「あ、ああ…。あんたが竜太郎か。」

「まさか!？」

「その声、あんた葵って子だな。じゃあそっちがヨネ…さんつてのか。あっちのは…」

どうやら本当に見えてるみたいだ。そしてあの男を見るや、店主も俺達と同じものを感じたのだろう、言葉を失った。

「やはりあなた様が裏におったのですな。」

店主にお構いなく、ヨネさんは話を続ける。

「察する通りじゃヨネ。しかし使えぬのう。思った程“念”がないわ。取り込んだ所でたいした意味がない。もう少し喰ったと思うておったが…。」

「そうやって人を物としか思わぬ所…あれから変わっておりませぬな。」

「はっはっはっ、そう怖い顔をするでないヨネ。400年振りの再会であろう?」

「そつでございますな。今こそ400年前の借り返させて頂きますぞ。」

何かしら二人には因縁じみたものがあるのだろうか？

「ヨネさん借りって？一体あいつは何なんですか？」

俺はヨネさんに聞いてみた。

「…仇じゃよ、娘のな」

そつ言つとヨネさんは奴を睨みながら語り始めた……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4784f/>

二つの世界

2010年11月19日16時07分発行